

症 例

ヘルニア臍絞扼症の1例

工藤 俊哉¹⁾, 柴田 裕達¹⁾, 毛利 麻里²⁾, 内沼 栄樹²⁾¹⁾ 横浜市立市民病院形成外科, ²⁾ 北里大学医学部形成外科

(平成16年6月9日受付)

要旨: 輪ゴムによるヘルニア臍基部の絞扼症という稀な病態を経験した。当科初診時, 突出した臍基部に絞扼痕みとめ, 一部皮膚潰瘍を伴っていた。軟膏療法を続けた後に臍ヘルニア根治術を施行した。手術時, 皮膚潰瘍は治癒していた。また, 周囲の臍突出部の皮膚は循環障害により暗紫赤色を呈していた。このため, 絞扼により障害された皮膚を円形に切除し縫合して縦長の臍窩を形成し, 良好な形態が得られた。本法は, 簡便に良好な臍窩形態を再建でき, 近年の縦長の臍の形態が好まれる傾向にも合致している点ですぐれた方法であると考えた。

(日職災医誌, 52: 375—377, 2004)

—キーワード—

臍ヘルニア, 絞扼症, 臍形成術

はじめに

小児の臍ヘルニアの輪ゴムによる絞扼症を経験した。臍ヘルニアの嵌頓症例は散見するが, 自験例は輪ゴムによるヘルニア臍基部の絞扼症であり稀な病態であった。小児の臍ヘルニアにおける臍形成術は, 臍部皮膚に複数の三角皮弁を用いる方法が一般的である。自験例では, 絞扼により皮膚が障害されていたため, 複数の三角皮弁を用いない臍形成術を行い良好な結果が得られたので, その経過と治療につき若干の考察を加えて報告する。

症 例

4歳女児。

主 訴: ヘルニア臍の皮膚潰瘍

現病歴: 出生後より臍ヘルニアを認めており, 最近は自分で頻繁に臍を触っていた。2002年8月16日夜, 自ら輪ゴムを臍部に巻き付けて就眠した。翌朝, 母親が臍茎部に輪ゴムがまかれ, 臍の皮膚色に変色しているのに気づき近医を受診した。8月19日, 当院小児科を紹介され受診した。臍部に皮膚潰瘍を認め, 軟膏療法をうけたが改善しない為, 発症後6日目の8月22日に当科依頼され受診した。

現 症: 初診時, 突出した臍基部に絞扼痕をみとめ, 一部皮膚潰瘍を伴っていた (図1)。ヘルニア内容の嵌頓の所見はなかった。

経 過: 軟膏療法を継続し, 皮膚潰瘍が治癒した後の

9月3日に, 臍ヘルニア根治術および臍形成術を施行した。

手 術: 手術時, 臍突出部の皮膚は循環障害により暗紫赤色を呈していた (図2)。皮膚変色部を円形に切除するよう皮膚を切開した。ヘルニア囊の周囲を剥離して囊を切除し閉腹した後, 左右の腹直筋前鞘を縫合して腹壁を補強した。左右の皮膚の真皮縫合糸を臍窩底部となる前鞘縫合部にかけて引き込んで縫合し, 臍窩を形成した (図3)。

術後経過: 術後経過は良好で, ヘルニアの再発もなく, 母親は臍形態に満足している (図4)。

考 察

臍ヘルニアは出生直後あるいは生後1カ月前後から認められることが多い。そのほとんどが2歳頃までに自然



図1 初診時 (2002年8月24日)。ヘルニア臍の中央部に皮膚潰瘍を認めた。

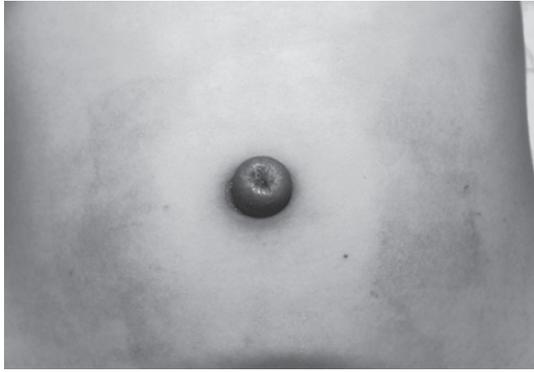


図2 手術直前の状態。ヘルニア臍中央部の皮膚潰瘍は治癒していた。

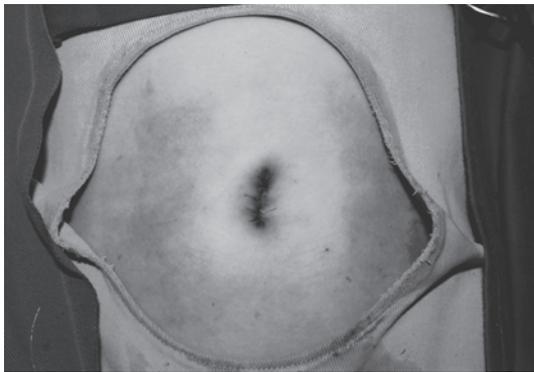


図3 手術直後の状態。



図4 術後約2カ月の状態。

治癒するとされている¹⁾²⁾。臍ヘルニアの手術適応は、ヘルニアの嵌頓あるいは非還納例、ヘルニア門が1.5cm以上と大きく嵌頓の恐れのある場合、2歳以降もヘルニア内容の脱出が続く場合、家族等の希望がある場合などである²⁾。内容の脱出がおさまった後でも、臍部の皮膚が余剰となり突出したままとなる、いわゆる“でべそ”

の状態となる。でべそに対しては整容的な目的で就学前に臍形成術を行うことが多い²⁾。1～2歳時でも、突出した臍を頻繁に引っ張ったり、引っ掻いたりするようであれば、手術を行う場合もあり得る。手術を行った臍ヘルニアの嵌頓症例は散見する¹⁾²⁾。自験例は患児自らのいたずらで行った輪ゴムによるヘルニア臍基部の絞扼症により手術を要するにいたった稀な例であった。

小児の臍ヘルニアにおける臍形成術は、臍部皮膚の複数の三角皮弁を用いる方法が一般的に行われている³⁾⁴⁾。近年は臍の形態は縦長が好まれる傾向があるとの報告もある⁵⁾⁶⁾。自験例では、絞扼により障害された臍部の皮膚を円形に切除し、三角皮弁を用いずに単純に縫合して臍窩を形成した。臍部皮膚を単純に切除縫合する手法は、非常に簡便でかつ良好な臍窩形態を再建できる方法のひとつであった。

まとめ

小児の臍ヘルニアの輪ゴムにより絞扼された症例について報告した。本症例は患児自らのいたずらが原因であった。臍ヘルニアの経過観察だけでなく、成長に伴う患児の挙動の経過観察が重要であり、適切な時期に手術を提案することが同時に重要であろう。

本論文の要旨は第51回日本職業・災害学会（2003年11月19日於、横浜市）にて発表した。

文献

- 1) 田淵陽子, 高田佳輝, 河崎正裕: 小児臍ヘルニア嵌頓の2例. 小児外科 33: 1145—1147, 2001.
- 2) 水田祥代, 山中清一郎, 窪田正幸, 他: 小児の臍ヘルニア. 外科診療 29: 573—579, 1993.
- 3) 鬼塚卓弥, 大塚尚治: 臍突出症(でべそ)の手術法. 形成外科 37: S279—283, 1994.
- 4) 宇田川晃一, 一瀬正治: 31. 臍形成術, 形成外科 38: S207—S212, 1995.
- 5) 朴 修三, 北野幸恵, 田中 博, 広比利次: 臍形態: 年齢や身体因子などの影響について. 形成外科 34: 173—177, 1991.
- 6) 辻野一郎, 宇津木龍一, 塩谷信幸, 内沼栄樹: 最近の臍の形態美を考慮した臍形成術. 日本美容外科学会報 20: 87—93, 1998.

(原稿受付 平成16.6.9)

別刷請求先 〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部整形外科
工藤 俊哉

Reprint request:

Toshiya Kudo
Department of Orthopediatric Surgery, Juntendou University of Medicine, Tokyo Rousai Hospital

A CASE OF CONSTRICTION OF THE HERNIATED UMBILICUS

Toshiya KUDO, Hirotatsu SHIBATA, Mari MOURI and Eiju UCHINUMA
Yokohama Municipal Citizen's Hospital Plastic Surgery

We report here a case of incarceration of the herniated umbilicus. A 4-year-old girl presented with a umbilical hernia since she was born. She had wound a rubber band around the base of the herniated umbilicus. Leaving a rubber band as it is all the night through caused circulatory failure of the umbilical skin, accompanied with skin ulcer. After ointment treatment of the skin ulcer, a radical surgery was performed to the umbilical hernia. New shape of the umbilicus was formed after circular excision of the protrusive skin.

The incarceration of umbilical hernia contents is often seen. However, the incarceration caused by the outside factor, such as the strangulation by the rubber band in this case, is very rare.
